

町村週報

(町村の購読料は会費)
の中に含まれております)

2783号

毎週月曜日発行

発行所 全国町村会 〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号：電話03-3581-0486 FAX03-3580-5955

発行人 山中昭栄：定価1部40円・年間1,500円(税、送料含む) 振替口座00110-8-47697

<http://www.zck.or.jp>

タンチョウ (北海道鶴居村)



も く じ	
随 情 情	活 活
想 報 報	動 動
誰もが輝く住みよいまちをめざして……………福岡県町村会長 志免町長 南里 辰己……………(12)	平成24年度政府予算編成で役員が要請活動……………(2)
町村Nav i……………(11)	国と地方の協議の場……………(3)
253の町村パワーが全開！～メイン会場への来場者は3万5千人に～……………(6)	・社会保障・税一体改革分科会(第2回、第3回)に石副会長が出席……………(5)
「国と地方の協議の場」に藤原会長が出席……………(3)	

コラム

いのちの世界の掟

ジャーナリスト 松本 克夫

「いのちの世界」と「おかねの世界」があると考えてみよう。花を見て、美しいと感じる時、人は「いのちの世界」にいる。花屋で花束を買う時、人は「おかねの世界」にいる。生き物の中で、複雑な社会をつくり上げた人間だけが二つの世界を往復している。政策や経営戦略を練る時、「おかねの世界」を豊かにすれば、「いのちの世界」もそれに比例して豊かになるという前提で考える。そこに落とし穴がある。

全国の耕作放棄地を集めると、埼玉県の面積をしのぐ。手入れされないで放置されている山林は、それに劣らず広大であろう。グローバル市場で、「おかねの世界」の豊かさを追い求めた結果がこれである。いくら作物や山林を育てるのに好適の土地があっても、海外から輸入した方が得となったら、容赦なく見捨てられる。「おかねの世界」を豊かにすると、「いのちの世界」が貧しくなる好例である。

大正から昭和の初めにかけて、長野県で活躍した地理学者の三澤勝衛は、風土を生かすことが人の務めであると教えた。山から吹き降ろす冷たい風や厚く積もる雪を始め、生かさないものはない。風土を織り込んだ風土産業を興すことこそ地域振興という。時代は移っても、人が「いのちの世界」の一員である限り、「風土を生かす」が守るべき掟であることに変わりはない。

TPP(環太平洋経済連携協定)についても、同じことがいえる。関税をゼロにして、広く競争原理を働かせれば、「おかねの世界」は豊かになるかもしれない。だが、「いのちの世界」は蝕まれて行く。

人類は、経済成長を続けると、地球温暖化の壁にぶつかるとに気付いたが、開国競争が引き起こす自然破壊には目をつぶっている。人と周囲の自然との間に親密な関係を築くことが基本である。その関係を壊して顧みない、おかねの亡者がつくる国際ルールが永続するはずがない。「いのちの世界」の掟に背けば、やがて天罰が下る。

●写真募集●

表紙に掲載する写真を募集しています。採用者には、粗品を差し上げます。写真には撮影者の住所、氏名及び撮影場所・日時を明記して下さい。なお、採否は当方に一任願います。送り先：全国町村会・広報部

活 動

平成24年度政府予算編成で役員が要請活動

全 町
村
会 国

■ 総務省



◀川端総務大臣（右から3人目）福田総務大臣政務官（中央）に要請を行う藤原会長（右から2人目）寺島副会長（左から3人目）稲葉副会長（右）遠藤副会長（左）白石副会長（左から2人目）

■ 農林水産省



▶鹿野農林水産大臣（右）に要請を行う藤原会長（左から2人目）古口副会長（左）杉本副会長（左から3人目）一瀬副会長（左から4人目）

■ 東日本大震災・防災対策関係



◀平野復興担当大臣（右）に要請を行う藤原会長（左から4人目）稲葉副会長（左から3人目）遠藤副会長（左）白石副会長（左から2人目）

■ 厚生労働省



▶藤田厚生労働大臣政務官（右から2人目）に要請を行う坂本副会長（右）中副会長（左）荒木副会長（左から2人目）

活 動

「国と地方の協議の場 第2回 社会保障・税一体改革分科会」に 石副会長が出席

全国町村会



▲会議に出席した石副会長（右）

全国町村会は、平成24年度政府予算編成を控え、11月30日に予算対策本部を設置するとともに、12月8日に正副会長会を開催し、会議終了後、役員が、去る11月30日の全国町村長大会で採択した決議、特別決議及び全国町村長大会意見(町村週報2782号参照)の実現方について、総務省、厚生労働省、農林水産省等の幹部に対し、3班に分かれて要請活動を行った。

要請先及び参加者

【総務省、東日本大震災・防災対策関係】

面談者：川端総務大臣、平野復興担当大臣、福田総務大臣政務官ほか
本会役員：藤原会長（長野県川上村長）、寺島副会長（北海道乙

部町長）、稲葉副会長（岩手県一戸町長）、遠藤副会長（静岡県長泉町長）白石副会長（愛媛県松前町長）

【農林水産省】

面談者：鹿野農林水産大臣ほか
本会役員：藤原会長（長野県川上村長）、古口副会長（栃木県茂木町長）、杉本副会長（福井県池田町長）、

一瀬副会長（長崎県波佐見町長）

【厚生労働省】
面談者：藤田厚生労働大臣政務官ほか
本会役員：坂本副会長（東京都檜原村長）、中副会長（大阪府能勢町長）、荒木副会長（熊本県嘉島町長）

12月8日（木）、「国と地方の協議の場 第2回社会保障・税一体改革分科会」が開催され、本会からは石副会長（鳥取県町村会長・日吉津村長）が出席し、意見を述べた。（分科会の設置は町村週報第2770号、第1回分科会は第2782号参照）
本会から出席した石副会長は、保育所保育士の加配の必要性、民生委員等の確保の困難性と研修費等地方が負担している実態、国保が抱える構造的な問題により、その制度維持のためやむを得ず一般会計繰入を行なっていること等を紹介した上で、地方単独事業の総合的整理にあたっては、形式的な整理ではなく、住民の視点に立つて総合的に判断するよう主張した。
この他地方側からは、「第1回分科会で問題があると指摘し、その結果非公開とされた厚生労働省資料が、今回、再び出されたが、これでは国を信頼できない」、「地方が実施している社会保障事業には、なんとか生活保護を受けずに頑張っている方々への準要保護児童生徒援助・給食援助、へき地医療や救急医療を支えるための公立病院等の保険収入外の繰入れ、保健所、保健センター、保育所などはマンパワーがあつてこそサービスが成り立つ、社会保障のあり方は、4経費に限定せず住民の視点でその在り方や財源について地方と十分議論すべき」といった意見が出され、地方の単独事業の必要性、重要性等についての正当な評価を求めた。
本分科会は、次回第3回（12月12日）で議論の整理を行い、その後「国と地方の協議の場」（親会議）に報告されることとなっている。（4・5ページ参照）

活 動

「国と地方の協議の場 第3回社会保障・税一体改革分科会」に石副会長が出席

全国町村会

12月12日(月)、「国と地方の協議の場 第3回社会保障・税一体改革分科会」が開催され、本会からは石副会長(鳥取県町村会長・日吉津村長)が出席し、意見を述べた。

第3回の分科会は、国側として、内閣官房、総務省、財務省及び厚生労働省の関係4府省で取りまとめた地方単独事業の総合的な整理の論点について、①社会保障四分野(年金、医療、介護、少子化)に該当するか、②給付に該当するか、③制度として確立したものであるかの三点から中身を精査、整理をする必要がある



▲会議に出席した地方六団体代表(右が石副会長)

との説明があり、これに対し地方側から、総合的な整理にあたっては、形式的基準によることなく、住民の視点に立って合理的なニーズが認められる地方単独事業は安定財源を確保する対象とするべき等を主張し、それらを踏まえ、意見交換が行われた。

- 本会から出席した石副会長は、私の村ではこの10年間で人口は8%増えているが、職員は増やしていない。保健師や社会福祉士を増やしていくため、一般行政事務職員を削減している。近隣に合併した1万2千人の町があるが、そこは職員を3割削って、保健師や社会福祉士を増員している。
- 保健師等の活動は、医療費等の抑制につながり、『官の肥大化』にはあたらない。

今回の3・8兆円の中に、厚生労働省の整理では高齢者福祉が入っていないというところであるが、介護状態にならないように地域包括ケアシステムという発想がある。介護保険によらず、地域の中で生活し続けるための対策であり、

議論の対象外としてはならない。国保の一般会計繰り入れや、民生委員の活動費などが3・8兆円の中に入っているのか確認したい。等と意見を述べた。

- この他地方側からは、地方側が提出した資料に対する政府の具体的な考えを示すなど、誠意ある対応をして実りある会議にすべき。
- 国民から見れば、社会保障について国の制度、地方の制度という認識はない。

大きなセーフティネットは国が、地域の実情にあった細かいセーフティネットは地方が担っているのが実情。

- 総務省の調査結果である6・2兆円から、本日3・8兆円、2・6兆円という数字が出てきたが、元からすると半分以下ではないか。金額に何が含まれているかの資料もなく、精査のしようがない。
- 「官の肥大」というのは国の話であり、地方では正規職員を減らして臨時職員対応としている。保育士なども正規の職員では現実には行なっておらず、パート・臨時職員で対応している。
- 市町村はマンパワーがなければサービスができない。人件費を除

外することについては考え直すべき。

等の意見があった。

- 一方、国側は、一体改革成案にあるとおり、社会保障4経費の分野の範囲に則った社会保障給付における国と地方の役割分担に応じた配分を実現するという方針となっており、この方針の下で地方単独事業の財源を確保する必要がある。
- 社会保障給付であるためには、受益が直接個人に帰属することが必要であり、人件費等の事務費は社会保障給付の対象外。

医療分野では、医療保険制度による医療の給付に要する費用、介護保険では介護保険制度に基づく介護給付に要する費用、年金では公的年金制度に基づく年金給付に要する費用、子ども子育て分野では子ども子育て新システムに基づく費用に要する費用等が該当し、介護以外の高齢者福祉等は対象ではない。

等の主張を繰り返し、意見の一致は見られなかった。

本分科会での議論は、12月15日に開催される「国と地方の協議の場」(親会議)に報告され、更に協議を行った。(5頁参照)

活 動

「国と地方の協議の場」に藤原会長が出席

「国と地方の協議の場」(第3回)が12月15日に総理大臣官邸で開催され、本会の藤原忠彦会長(長野県川上村長)ほか、地方六団体代表が出席した。政府側からは、野田総理大臣、藤村官房長官(国と地方の協議の場議長)、川端総務大臣、安住財務大臣、小宮山厚生労働大臣、古川国家戦略担当大臣、蓮舫行政刷新・公務員制度改革担当大臣らが出席、「地方財政対策」「社会保障・税一体改革分科会における議論の経過について」「子どもに対する手当」について協議を行った。



▲出席した藤原会長(右)

▲冒頭に挨拶する野田総理

はじめに「地方財政対策」について協議を行い、地方六団体は『平成24年度地方財政対策等について』を提出し、本会の藤原会長は、「財政基盤が脆弱な私ども町村にとって、『地方交付税』は極めて大事なものである。三位一体改革の結果、都市部との地域間格差が拡大し、町村は極めて厳しい財政運営を強いられ、地域の疲弊が深刻化している。こうした中、地方交付税は、平成20年度以降、徐々に増加が続き、一部復元しつつあるので、是非この流れを継続し、来年度も出口ベースの交付税を確実に増額し、復元の道筋を明確にしていきたい。」と発言した。安住財務大臣から「国債

の償還に四苦八苦しており、我が国の財政状況は危険水域にあることを共有してもらいたい。国の状況を勘案しながら総務省と最終的な協議をしたい。」との発言があった。

次いで、川端総務大臣から、本年11月から3回に亘り開催した社会保障・税一体改革分科会における議論の概要が説明された。小宮山厚生労働大臣からは「地方単独事業の総合的な整理については、成案に基づき地方単独事業を含めた社会保障給付の全体像、その総合的な整理、社会保障に要する費用全体を的確に把握し、分類することが必要、増税分は社会保障4経費に充当することとなっており、厚労省では4経費に該当するものを消費税収に充てることが重要と考えている。」との発言があった。これに対し地方側からは、「地方の役割は紋切り型では割り切れない。地方の現場を見て話してほしい。」(山田知事会長)と反論した。子どもに対する手当については、小宮山厚生労働大臣から、国と地方の費用負担の検討状況について、「地方の裁量が増やせるような分野での補助金の一般財源化について財務

省、総務省と検討しているところである。地方からの意見に真摯に対応し、引き続き検討する。」との説明があった。

藤原会長は、「前回(11月29日開催)国と地方の協議の場第2回臨時会合)、地方が納得できるものを再提案してほしいとお願ひした。提案がなければ議論が進まない。このまま地方と協議できず、与野党協議もできないとなると、再びつなぎ法案となり、もつと地方は混乱する。しっかりとアイディアを出して、しっかりと給付できるような方法を考えていただきたい。」と発言した。

最後に、藤村官房長官から、「あまり時間はないが、厚労大臣と六団体でそれぞれ納得したく形を、来週の中頃くらいまでに詰めていただく。最終的には総務省、厚労省、そして間に財務大臣が入って決めた。今度は個別に各会長と最終の詰めをしていきたい。」との発言に対し、地方側は、「国と地方の協議の場というのは、地方の意見をきちんと国会に伝える場でもある。地方の声というのは、この場において届けていかなければならない。案の出なまま国と地方の協議の場が終わってしまうのでは、納得できない。」(山田知事会長)と主張した。

地域資源を活かした活性化策

町イチ!村イチ!2011レポート

253の町村パワーが全開! ～メイン会場への来場者は3万5千人に～

▷2日目オープン前の待機列



全国町村会主催

町イチ!村イチ! 2011

～町村から日本を元気にする～

2011年12月3日(土) 12時～19時

12月4日(日) 10時～17時

会場: 東京国際フォーラム 展示ホール1(B2F)

/ロビーギャラリー(B1F)

サテライト会場 有楽町駅前地上広場



◁最後尾は地上に!一時は、1時間待ちにもなった待機列

開会式

2011年12月3日(土)、4日(日)の2日間にわたり、「町イチ!村イチ!2011」は、町村から日本を元気にするべく、東京国際フォーラム(有楽町)と有楽町駅前地上広場の2会場において、開催しました。会場には、253町村の「イチオシ」の物産が並び、24町村からのステージによる伝統芸能等の披露や、町イチ!村イチ!食堂での38町村の郷土料理の販売や試食など、たくさん「イチオシ」との出会いに、感動と笑顔があふれる2日間となりました。会場では、43体のゆるキャラ達が、愛嬌たっぷりのパフォーマンスで、盛り上げてくれました。

メイン会場の開会式は、11時30分より、関係者に向けた全国町村会藤原忠彦会長の激励挨拶とともに、43体のゆるキャラ達とのラジオ体操で始まりました。心癒されるゆるキャラ達の動きに、会場内の緊張が解け、大勢のお客様を元気いっぱい笑顔で迎えることができました。(開催中、ゆるキャラの中に入り、ハードなスケジュールをこなしていただいた皆様には、本当に感謝です。)

有楽町駅前地上広場は、前日から

情 報

◁2会場での藤原会長挨拶
◁ゆるキャラ43体と一緒にラジオ体操で景気づけ



続く冷たい雨と強風で、一時は開催が危ぶまれたものの、オープニング時には、小雨となり、藤原会長の開会の挨拶により、無事開催ができました。

◇東京国際フォーラム

地下2階展示ホール1

オープンを前に、両日共に待機列ができるほどの盛況で、ピーク時には1時間待ちになるほど。入場を制限した時間帯もありました。1日目に来場した方の中には、2日目にも足を運んでくれた方も多くいて、これは他の物産展ではあまり見られないことのようにです。

各エリアでのPR

3000㎡の展示ホール1には、

北海道、東北、関東、北信越・東海、近畿、中国・四国、九州の7エリアに分かれ、253町村の展示台が並びました。90cm×90cmという限られたスペースながら、展示の仕方には、それぞれの工夫が施され、来場者へのお国言葉での温かい声掛けに、足をとめてじっくり話を聞く来場者が多くいました。受付で配布した町イチ！村イチ！エコバッグを肩にかけ、会場を行き交う人たちの目の前にして、思い描いた光景が現実のものとなり、胸が熱くなりました。このエコバッグは、マチを広く作ったことで、購入したモノがたくさん入り、購買へとつながったところもあるようです。JRや地下鉄では、町イチ！村イチ！エコバッグを持つ方が目立ち、誘引にも一役買っていました。各エリアでの展開には、



▷来場者との会話が弾んだ展示台

◁大盛況の地下2階展示ホール1



それぞれの味わいがあり、加えてお隣同志の助け合いが一体感を醸し出したことで、会場中が笑顔と熱気に包まれ、賑わいが生まれました。大判振る舞いの試食・試飲と低価格設定で来場者の財布の紐がつい緩み、初日から完売のところが多くあったようです。

来場者からは「楽しかった」「元気をもらった」との声を多く聞いた



▷メニューは食堂マップでチェック

きました。1日目に苦戦した町村もミーティングを行い、力を合わせ、挽回を図った今イベントに対する姿勢には頭が下がる思いでした。各町村からも、「良いイベントだった」「学ぶことが多かった」「PRの目的を果たせた」とのメールや電話をいただいています。今回のイベントは、売上げが目的ではなかったとはいえ、今後は商談会や観光・定住などに結び付けていくための展開の方法を検討していくことが求められるでしょう。

町イチ！村イチ！食堂

当初心配された食堂での調理・販売の展開でしたが、各町村間での協力と調理専門スタッフのおかげで、予定通りの料理を無事提供することが出来ました。出展された町村同士の「お互い様」の関係が、功を奏したと言えるでしょう。「思ったより、IH（アイエイチ）の火力が強く、お湯が早く沸いた」という声も多く、首都圏

情 報

◁町イチ！村イチ！のために取り置きしてくれた、幻の甚五右衛門芋煮！



らの声が多く聞かれました。ただ、食事できる場所が十分に用意できず、ゆっくり味わっていただけなかつたことが残念です。

町イチ！村イチ！ステージ

ラジオDJとして活躍されている齊藤りよーつ氏と野村ふみえ氏との掛け合いによる軽快な進行で、北海道白老町「アイヌ古式舞踊」、青森県平内町「津軽三味線」、秋田県羽後町「西馬音内盆踊り」、大阪府能勢町「人形浄瑠璃」、鹿児島県知名町「島唄」、長野県下諏訪町「御柱大祭木遣り歌」などの伝統芸能や和歌山県日高町の「QUE（クエ）ライブ」、山形県川西町「食育こどもミュージカル『どんでん森はどつきどき』」が披露され、ステージの前では、故郷に思いを馳せ、涙する人もいました。



▷進行してくれた、斎藤りよーつDJと野村ふみえDJ



▷2000年の伝統 大阪府能勢町「人形浄瑠璃」

◁AKB48も踊れちゃう群馬県草津町の湯もみちゃん



各町村による一生懸命のPRにも心とまされました。特に群馬県草津町のゆるキャラ「湯もみちゃん」による軽快な踊りのパフォーマンスには、

笑いと同時に誰もが感嘆の声を上げていました。入場無料で、なおかつワインやビールを片手に、素晴らしいステージを見ることが出来たイベントは、おそらく初めてではないでしょう。来場者からも「驚沢な時間を過ごすことが出来た」という声が聞かれました。出演者からは、「舞台の高さが、丁度良く、見ている人と近いところで演じることが出来た」という声をいただいています。

町イチ！村イチ！ボール

PRステージにも登場してくれた、イケメンシエフとして有名なベリッシモ氏プロデュースによる、町村の食材を贅沢に使ったイタリアン寿司弁当と蜂蜜にこだわったピザ等、今後町村にとって、レシぴ開発

◁新しい食感！町イチ！村イチ！ボールで、イタリアン寿司と蜂蜜たっぷりピザをご提供



△世界でたった1つ 町イチ！村イチ！弁当

の参考となるコーナーを設けました。特にこのコーナーは、外国の方に好評でした。

ゆるキャラフォトコーナー

出口に配したこのコーナーでは、



▷ゆるキャラフォトコーナーは、連日大人気

での販売に自信を得た町村もありました。食堂では東京初出展となる岩手県西和賀町「ビスケットの王さまから」や珍しい青森県大間町「大間のまぐろバーガー」、冬にはありがたい秋田県五城目町「だまご鍋」、幻の甚五右衛門芋の入った山形県真室川町「芋煮」など、普段首都圏では味わえない郷土料理に多くの人が舌鼓を打っていました。

食堂では、初日から売上が続出で、

1日目に振るわなかつた町村も、真剣に話し合い、2日目は積極的に声かけをするなどして、ほとんどの町村が完売していました。「食堂はどれも美味しかった」という来場者か

情 報

順番にゆるキャラに登場いただきま
した。来場者の反応から、各町村に
誕生しているゆるキャラ達は、PR
には欠かせない存在となっているこ
とを実感しました。933全町村の
ゆるキャラ勢揃いというのも、そう
遠い未来ではなさそうです。

◇B1ロビーギャラリー

誘引ディスプレイ・マルシェ・
写真展示ゾーン

誘引ディスプレイゾーンには、各
町村の「イチオシ」が専門のデザイ
ナーの手によって並べられ、通行人
の目を引き、誘引の役目を果たして
くれました。

実演・体験コーナーでは、福島県



◁B1ギャラリーでの実演・体験コーナー

昭和村「からむし織り」、岐阜県白
川町「まゆ手つむぎ」、兵庫県神河
町「透かし彫り」、愛媛県砥部町「口
クロ体験」により、伝統の技をゆっ
くり味わっていただけただようです。

生鮮品を中心に置いたマルシェ
も、通行人を呼び込み、最終日には
見事完売となりました。試食なしの
販売にもどかしさを感じられた町村
もあつたでしょう。

「イチオシ」の写真を飾つ
た写真ギャラリーに足を止
め、じっくりとパネルを眺め
る方も多くいて、限られた情
報しが盛り込めなかつたこと
が残念です。

震災復興支援ゾーン

首都圏の方々が、被災地支
援に対する意識を継続しても

◁震災支援ゾーンに展示された岩手県住田町の木造仮設住宅



らえるよう、岩手県住田町の木材を
使った仮設住宅を展示し、被災地域
における復興の様子や支援状況を紹
介するとともに、地震シミュレ
ーターやAEDの体験による防災意識
の啓発や森林整備の必要性などの提
案や情報発信を行いました。

仮設住宅に触れ、地震の揺れを実
際に体験することで、被災した方々
の生活をより身近なものとして感
じ、支援に対する意識を高めること
ができたように思います。間伐材を
使った1万個のグッズに、「町イチ！
村イチ！」の焼き印をつけ、来場者
に配布しました。

◇サテライト会場
(有楽町駅前地上広場)

屋外ステージ

外のサテライト会場では、MCの
林 笑(はやし えみ)氏の進行に
より、茨城県大洗町「大洗本場磯節」、
滋賀県日野町「日野祭ばやし」、熊
本県多良木町「上槻木の太鼓踊り」、
岐阜県白川町「奥新田天明獅子」、
東京都八丈町「八丈太鼓」、福島県
磐梯町「会津赤枝彼岸獅子」、新潟
県聖籠町「聖籠太鼓」、愛媛県松野
町「松野鬼城太鼓」などの太鼓の演



▷町村のイチオシが並んだ
誘引ディスプレイ



▷マルシェは、すべて完
売！



▷熊本県多良木町「上槻木の太鼓踊り」

情 報

◀サテライト会場の最後を飾った愛媛県松野町「松野鬼城太鼓」



目中心の舞台となりました。心にとんと響いてくる太鼓の音が有楽町に鳴り響き、雨風を吹き飛ばすほどの勇壮なパフォーマンスに、足を止めた人々が最後まで見入っていました。出演していただいた方からは、「大きな拍手をもらい、観客との一体感があった、気持ちよく演じられた」という声をいただきました。

ここでも群馬県草津町の湯もみちゃんの軽快な動きには驚きの声があがり、愛知県長久手町の「長久手歴史トラバース」のなり切りPRステージなど、有楽町駅前サテライ

トステージが笑いと感動に包まれていました。まさに、町村から日本を元気にしていく底力をアピール出来た最高の舞台だったと思います。

最後に

繰り返しになりますが、町村の方々の温かい人柄に触れることが出来たことで、来場者からは、「楽しかった」との声が多く寄せられました。さらには出展された町村の方々が、積極的に会場を回り、他の町村に声かけをしている姿をあちこちで見かけました。各町村間での「お互い様」の助け合いが、新たな絆を生み、来場者を巻き込み、みんなの「楽しかった」に繋がった気がします。

感謝の言葉とともに

全国町村会が主催となる初めてのイベントで、予想以上の反響に驚くとともに、出展者の皆様のご尽力と各都道府県町村会の皆様のご協力に深く感謝申し上げます。また、このイベントを通して、ネット社会でありながら、個々の町村の魅力伝えるためには、まだ情報が不足しており、各町村に眠っている「宝物」の掘り起こしの必要性も見えてきたように思います。

今回は、他の物産展にはない程の試食・試飲の数や、価格設定の低さが、販売促進の力となり、町村関係者約1500名、各都道府県町村会関係者約180名、臨時のアルバイトを含め主催者総勢約600名のスタッフの思いと協力の力が、結果を生み出したのでしよう。ただ、PRという点では一石を投じたとはいえ、課題もあり、結果検証が必要でです。是非、このイベントでの繋がりを活かし、学んだことにさらに磨きをかけ、バージョンアップしていける

よう次回開催に向け、皆様からの声をお寄せいただきたいと思います。今回、商標登録した「町イチ！村イチ！のロゴマーク」も皆様とともに、大切に育てていけることを願って、このレポートを終わりにします。

(全国町村会 広報部)



◎休刊のお知らせ◎
12月26日付と1月2日付の町村週報は、休刊とさせていただきます。第2784号は1月9日付の発行となりますので、ご了承の程、よろしく願います。

随 想

誰もが輝く
住みよいまちをめざして福岡県町村会長
志免町長 南里辰己

志免町は、アジアの玄関口である福岡市の中心部から南東へ8km、また福岡空港から東へ2kmに位置します。町域は、南北に細長く、面積8・7平方キロメートルと小さい中に、人口45,154人(平成23年12月1日現在)が生活しています。福岡市との境に丘陵地がある他は、ほとんどが平坦地ですが、農地は少なく、市街地が大部分を占めています。平成22年の国勢調査では人口密度が、全国の町村で第一位となりました。空港や地下鉄に近いことや近隣に大型商業施設等があることから、生活に便利な町として、今日もなお人口が増加しています。他に資源のない我が町にとって、「人」はかけがえない資源です。多くの人に住んでいただいている、志免町を選んで、ただいけるといふ喜びと同時に、

安全・安心で快適に、住んで良かった、住み続けたいと思える、そんな町づくりを進めていく責任を感じています。

世の中が少子化対策に取り組んでいるのに対し、本町の子どもの数は増加をつづけ、小中学校の増設の必要が生じるという、うれしい悲鳴もあります。子どもが増加する中で、子どもが安心して、自分らしく生き生きと育て欲しいという願いから、平成19年には、志免町子どもの権利条例を制定し、子どもたちの目線に立った取り組みに努めています。今後もさらに、次世代を担う子ども達が、心豊かに、たくましく成長できる町づくりを目指し、子育て支援を推進していきたいと考えております。

住環境の面におきましては高い利

便性を備えているところですが、その一方で、産業や観光の面では、その資源に乏しく、魅力ある町づくりに頭を悩ませているところでしたが、平成21年に炭鉱の近代化遺産である「旧志免鉱業所竪坑櫓」(ホールページでぜひ一度ご覧下さい)が国の重要文化財に指定されました。この竪坑櫓は、掘った石炭と働く人を昇降させる建造物で、地下430mまで移動できました。櫓と巻上機が一つになったエレベーターの仕組みをもつワインディングタワー型と呼ばれるものです。

重要文化財の指定に至るまでは、紆余曲折があり、一時は解体が保存か議論が沸騰しましたが、経済産業省やNEDOへの折衝を重ね、最終的に保存へ漕ぎつけることができました。当時は、解体するも保存するも、財政上の負担が大きく、進むも地獄退くも地獄といった状況でしたが、安全面で最低限の措置を行いながら、保存するという「見守り保存」という画期的な方策により今日まで保存して参りました。この「見守り保存」から数年経ったのち、産業考古学会の認定を受け、更には国の重要文化財指定という歴史的な日を迎えるこ

とことができました。

この解体か保存かという議論は、方向性を決定することの難しさを改めて思い知らされた出来事であり、町長としての決断に至るまで、その建造物の圧倒的なスケール、重厚感と同様に、職責の重さを身に染みて感じ、歴史の法廷に立つ覚悟で取り組んだ課題でありました。しかし、今となつては良き思い出となり、国の重要文化財となったこの建造物を見るにつけ、感慨深いものがあります。

今後は、竪坑櫓を町づくりのランドマークとして、地域に愛される近代化遺産として、「活用保存」し、町の活性化のためにどう生かしていくかが、私に課せられた使命であります。

昨年、「第五次総合計画」を策定し、まちの将来像を「誰もが輝く 住みよいまち」として掲げました。人口の増加、子どもの増加という恵まれた環境を生かし、住民一人ひとりが輝き、「住んでよかった」「住み続けたい」と思える魅力ある町づくりに、取り組んでいきたいと思っております。そこに住んでいる人が主人公であり、何よりもそこに住んでいる人たちが一番大事なのであります。